

# 「母」を葬るために——のぶみ『ママがおばけになっちゃった!』を読む

藤木 直実

はじめに

絵本業界においては、一般に初版は四〇〇〇から七〇〇〇部程度を発行、一年で一万部を超えるとヒット、五万部を超えると大ヒットとされるという。また、ベストセラーはすなわちロングセラーであるのが常で、たとえば講談社を代表するダブルミリオンセラー絵本『100万回生きたねこ』が四〇万部を突破するまでには、初版（一九七七年）から一四年の歳月を要している。同社から二〇一五年七月に初版四〇〇〇部で刊行された『ママがおばけになっちゃった!』<sup>1</sup>は、わずか一年ほど後の翌年一月には一六刷四一万部を計上、「大ヒットしたミリオンセラーと比べても「おばけ」なスピードで支持が広がった絵本」として話題となった。<sup>2</sup>現在までにシリーズ三作累計五九万部を刊行、多くの地域図書館に所蔵され、予約が絶えない状態が続いている。

1 「異例のヒット」と「感傷の共同体」

「ママは、くるまに ぶつかって、おばけに なりました」と始まり、残された息子が「ひとりや、やれるよ」と自立を表明して終わる本書は、「口コミで「泣ける」と話題」「共感できるストーリー」と報道される一方で、Amazonのレビューでは総数五九一件のうち星五つが二七三件（四六%）で星一つが二三三件（四〇%）と拮抗<sup>4</sup>、肯定派は「死を考えるいい機会となった」、対する否定派は「死を軽く扱えず」と述べており、「死の描き方」が賛否を分ける争点となっていると言っており、本書について「母の死」をポップなタッチで描いて大ヒット」と総括する堀越英美は、さらに否定派の見解を代弁して次のように述べる。「死んでおばけと化したママが「うっげー!」「コンニャロー!」と子供にツッコむコント感。そこから超特急で子供への愛を涙ながらに語るケータイ小説感。絵本好きの大人が考える「良質な絵本」という概念から、何億光年もかけ離れた作品であることは間違いない」<sup>5</sup>。